

資本輸出に関する一考察：「帝国主義論」体系と資本輸出

皆村，武一

<https://doi.org/10.15017/2999989>

出版情報：経済論究. 25, pp.47-74, 1970-10-01. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：

資本輸出に関する一考察

——「帝国主義論」体系と資本輸出——

皆 村 武 一

- 第一章 『帝国主義論』体系と資本輸出
 - 一節 資本輸出一般と『帝国主義論』の資本輸出
 - 二節 『帝国主義論』プランと資本輸出
 - 三節 資本の過剰と国民的利潤率
 - 四節 学説史的批判 (以上本稿)
- 第二章 レーニン資本輸出論の展開
 - 一節 資本輸出の成長
 - 二節 資本輸出の規模
 - 三節 資本輸出の意義
- 第三章 イギリス、ドイツ金融資本と資本輸出

はじめに

従来の、マルクス経済学の立場からの資本輸出に関する多くの研究は、レーニンの『帝国主義論』にその論拠を求め、その理論的構築のために『資本論』に依拠してきた。⁽¹⁾そして資本の過剰の問題を取りあげ、レーニンに従って、段階規定、すなわち、独占資本主義段階における資本輸出を論じようとしてきた。そのために、まずは、『資本論』段階＝産業資本主義段階における資本の過剰とは何か、そして、独占段階における資本輸出の必然性を規定する資本の過剰とは何であるのかが論じられてきた。このように、『資本論』によって、一般原理的に資本輸出を解明しようとすることは必要なことだが、レーニンの意図する『帝国主義論』の中の資本輸出を『資本論』の土俵で解明しようとしても、それだけでは不十分である。なぜなら、『資本論』と『帝国主義論』自体の研究目的は異なっており、従って、研究材料・分析方法もおのずから違っているし、『資本論』における資本の過剰でもって、『帝国主義論』における資本の過剰は理解できても、資本輸出の位置づけは理解できないからである。⁽²⁾

この小論文では、レーニンの『帝国主義論』がいかなる時代的背景の下に叙

述され、何を研究目的としていたか、さらに、資本輸出論は『帝国主義論』の中でいかなる位置を占め、当時いかなる状態にあったのか。それらを究明するためには、レーニンがなした準備作業「帝国主義論ノート」（『HEFTE ZUM IMPERIALISMUS』W. 1. LENIN BAND 39）を検討してみる必要にせまられる。資本の輸出は、独占とともに、帝国主義の経済的基礎をなすものであると、レーニンは主張しておる。したがって、資本輸出は独占と有機的関連をしながら、帝国主義—世界経済の基礎をなすものである。

『帝国主義論』が1916年当時の世界経済の分析の書であるからには、現代世界経済を分析する手がかりとして、レーニンに学び、その研究態度、分析方法を学びとることは大切なことだと思う。

そこで、第一章では、従来の諸研究を批判的に摂取し、第二章では、『帝国主義論』の中の一章としての資本輸出の展開とし、その論文の中心的課題とし、第三章では、イギリス・ドイツを中心とした史実研究の成果を踏えて、帝国主義論の理論的補完ないし、批判をおこなうことにする。

- (1) これまでの資本輸出の研究動向は、一つは、マルクスの「経済学批判体系」プランの中に、資本輸出論を位置づけ、いわば一般原理論の規定を求めようとする方法であり、他は、レーニンが資本輸出を段階規定しているところから、帝国主義段階においてもっと重大な意義を与ようとする方法である。その他に、世界資本主義の歴史構造と関連させて資本主義の再生産構造と資本輸出という視角から論じた労作もある。入江節次郎「重工業資本主義と資本輸出」（『世界資本主義の歴史構造』河野健二編）だが、われわれが資本輸出論の論拠をレーニンに依拠し、その視角に立って論じようとするならば、資本輸出は「帝国主義論」の中でいかなる規定をなされ、それによって何を意図していたのかが明らかにされなければならない。
- (2) 『帝国主義論』は『資本論』の直接の継承発展であり、マルクスの「経済学批判体系」の「編別プラン」として与えられた経済的諸範疇の論理の必然的な序列、いわゆる「上向法」の展開であるとする見解もある。清水嘉治教授はレーニンが意識しているといわないにもかかわらず、マルクスの「経済学批判体系」の「編別プラン」として与えた経済的諸範疇の論理の必然的な展開序列、いわゆる「上向」法展開の序列 (一)資本 (二)土地所有 (三)賃労働 (四)国家 (五)外国貿易 (六)世界市場と『帝国主義論』の基本構成ないしは、原則的に一致しているということができるといえる。『帝国主義論』が『資本論』で与えられた「競争」の「独占」への必然的転化に関する基礎規定から出発して「独占」の支配を説き、つづいて「信用」「株式会社」に関する

「資本論」の基礎規定（第3巻第27、36章）にしたがって「独占」と「金融資本」への成長と「金融寡頭支配」の国際的展開の諸形態をまず「商品輸出」に代って「資本輸出」の優位性、さらにそれを動脈として形成される「金融資本の国際的支配網—国際カルテルによる「世界の経済的分割」さらにそれを土台とした「帝国主義列強による地球の「領土的分割の完了」—植民地制度の形成、そして最後に帝国主義世界体制とその矛盾の総括としての「不均等発展」とそれにもとづく「世界の再分割」—帝国主義戦争の不可避性として体系づけた。」と述べている。「帝国主義研究に関する方法論」（関東学院大学経済系第72号）清水教授はこのようにして、「資本論」と「帝国主義論」の方法をまったく同一のものだとし、「帝国主義論」は「資本論」の直接発展の産物であると主張されるのであるが、「帝国主義論」の準備ノートを検討して見れば、このような主張は退けられねばならない。だからといって、筆者は、宇野教授グループの「原理論」、「段階論」のように、論理的関連を打ち切るものでもない。「帝国主義論」が簡単な概説書があるせいで、詳細な経済的分析を欠いているから「資本論」によって、理論的深化をはかることは大切なことだが、「帝国主義論」のプランそのものの検討も忘れてはならない。

（1）資本輸出論の方法

（一）資本輸出一般と『帝国主義論』の資本輸出

序論で言及したように、従来のマルクス経済学の立場からの資本輸出に関する多くの論者は、レーニンの『帝国主義論』の第四章、資本輸出にその論拠を求め、その理論的構築のために、『資本論』にその体系化を求めてきた。例えば、堀晋作教授は、⁽¹⁾「レーニンは『帝国主義論』の論理的展開においてマルクスの『資本論』に理論的連繫を求め、さらに、世紀転換期たる独占の段階の主要文献に対する批判的加工によって、マルクス経済学批判体系の完成のために諸労作を発表した。かくて、金融資本の依存と連絡の国際網の創出にあたって、資本輸出の演じる役割が特に強調されているが、それは、国家、外国貿易、世界市場および恐慌というマルクス経済学批判体系化への、具体化への歴史的論理的上向が、帝国主義段階においてはじめて外国貿易と世界市場における支配的な地位と形態とを獲得する「真に具体的なものたらしめ、批判の対象たらしめたからである。……」と述べマルクスにおいては、資本輸出一般を規定するものとして、すでに『資本論』の中に、それは特に第三巻三篇の「利潤率の傾向的低落の法則」その中でもまた特に、第十五章「法則の内在的諸矛盾の展

開」において展開されていると主張される。

堀教授の主張は (一)レーニンの『帝国主義論』を『資本論』の後半体系の歴史的論理的上向として捉えていること、(二)レーニンの資本輸出の意義については正しく評価されているにも拘わらず、結局は『資本論』における資本輸出一般に埋没させてしまっている。⁽²⁾

『資本論』は一国商業社会を想定し、ブルジョア社会の生成、発展、消滅の過程を究明することを任務としていた。⁽³⁾したがって『資本論』の範囲内（プラン体系の前半の3つの部分）では、直接の研究対象としての外国貿易、世界市場は捨象されている。資本主義にとって、外国貿易は前提でもあり、結果でもあり、必要不可欠であるにも拘わらず、あえてこれを捨象しているのは、資本制的生産の諸矛盾の内的展開によって、ブルジョア社会そのものの解体（＝労働者の自立性の奪還への要求）を理論づけようとするためである。したがって、『資本論』第三卷三篇の『利潤率の傾向的低下の法則』特に十五章の「内的諸矛盾の展開」は資本主義の諸矛盾の集中的表現であり、この諸矛盾の克服のため、あらゆる方法を駆使するのであるが、その一つが対外商業であり、資本輸出である。したがって、堀教授の云われる、資本輸出一般は、資本の過剰（＝利潤率の傾向的低下）に対処する方法の一つといえよう。⁽⁴⁾それはそのとおりだが、それだけでは、帝国主義段階における資本輸出の意義は理解できない。

プランの後半体系までいけば、外国貿易（生産の国際的關係、国際分業、国際的交換、輸出入為替相場）世界市場が展開されなければならないし、そこにおいては、商品の輸出入と並んで資本の輸出を論じても理論的不整合性はないだろう。だが、「資本論体系」（プラン体系）を社会変革の理論書だと（世界市場と恐慌を最後の範疇とする）として把えるなら、外国貿易は、世界市場と恐慌に至る媒介項としての制約性を持つものである。

ヒルファーディングも、まず資本輸出について、外国で剰余価値を生むことに向った価値の輸出である。そして本質的なことは、剰余価値が相変らず本国の資本によって自由に処理されることである。」（『金融資本論』）^(林要訳大月版461)と資本輸出についての一般規定を述べ、つづいてレーニンとは異った彼独自の段階規定をおこなうのであるが、レーニンの資本輸出論は、資本輸出一般として論じられて

いるのではなく『帝国主義論』の一章として位置づけられているのであり、また、金融資本が世界に網の目をはりめぐらし、支配、搾取のための経済的紐帯としての役割を果しているのである。レーニンが若干の誤りは指摘しつつも、賞讃したように、ヒルファーディングは「資本主義の発展における最新の局面」のきわめて貴重な理論的分析の書を残しているが、それは『資本論』と同じく基本的にはドイツを模範としつつ、一国資本主義の分析におわっている。

『金融資本論』は、金融資本の抽象的理論においてはきわめて秀れた書であるが、レーニンの『帝国主義論』がより広く世に読まれるのは、まさに、帝国主義とは、一国資本主義の独断場ではなく、経済的紐帯によって相互密接に結びついた国民経済体の総合であるが、それをその全体性において、すなわち、金融資本の世界体制として把握しているからであろう。⁽⁵⁾

レーニンは、現実の世界経済を鋭い直感力と抽象力で帝国主義の基本的な経済的諸特質の相互関連を述べたのが『帝国主義論』である。すなわち、この書は、帝国主義の構造と歴史的な位置づけを明確にしたものであるから、両者は資本輸出論においても、有機的統一のものでなければならない。

C・Kホブソンのように、⁽⁶⁾イギリスの資本輸出が投資国イギリスにどのような効果と影響を与えるだろうかを意図した研究と、レーニンの『帝国主義』の経済的特徴として資本輸出を論じる場合にも、その方法論、分析材料は異っているのである。

この論文では、帝国主義の経済的特徴としての資本輸出を論じようとするものである。

(1) 堀晋作「資本輸出論の方法」国学院大学第15巻第1号

なお行沢健三教授は、資本輸出論を明確に経済学批判体系のプランの中に位置づけておられるのではないが、資本の価値増殖の過程の論理からそれを論じておられる。資本輸出を貨幣の資本への転化 $G-W-G'$ を取り上げ、この過程の主体は価値であり、過程しつつある価値となる。「価値が外国に送られて、そこで自己増殖の過程をとげ、剰余価値を外国から引き出した時に、資本輸出がおこなわれたのであり、その場合、所有権はもとの国にとどまっていることが必要である。」として例のヒルファーディングの定義を是認している。「国際経済学序説」282～85頁)

このような規定は、資本の一般運動としての説明にはなるが、帝国主義の経済の本

質として位置づけることはできない。

- (2) 資本輸出に関する多くの研究が『帝国主義論』にその論拠を求めながらその多くは、マルクスのプラン体系では、資本輸出をどのようにとり入れるかを問題にされている。例えば、杉本昭七教授が指摘されているように、（『現代帝国主義の理論』^{179頁}）「村岡俊三氏は、資本輸出をプランの「生産の国際的諸関係において抽象的に規定しようと考えられておられ、行沢健三氏も「資本論的な理論の段階でも取り上げる意味があるといわれ、高木幸二郎氏も同様な見解に立ておられるようであり、山田隆士氏もまたそうである。」と、このように「資本論」によって理論深化させていくことは必要なことだが、それだけではレーニンの主張する資本輸出の意義は失われてしまう。
- (3) 現行「資本論」の範囲内における論理展開（一国商業社会を想定し、そこにおける、生産者の収奪を出発点とし、勤労者の所有から非勤労者への所有の転化の過程＝資本主義の発展過程を追求すること）では、もともと、国際相互連関という視角はなく、市場創造過程＝一国商業社会の内包的・外延的発展の視角があたえられている。この見解には反対される立場もある。例えば渋谷将氏の「経済学体系における外国貿易」（世界経済評論1968年3月号）を参照されたい。
- (4) 渋谷将氏は前掲論文で「全商業世界を一国と見做すという仮定は、一巻七篇だけであり、二巻三篇では、外国貿易が捨象されたのは、再生産の方法を純粋に捉えるために混乱を招くからである。三巻三篇では、「利潤率の傾向的低落の法則」に反対に作用する要因として外国貿易がとり上げられている。すくなくとも、ここでは、外国貿易は取り上げられなければならない、従って全商業世界を一国とみなす。」という前提は成立しないと言われる。問題の三巻三篇は、明らかに利潤率の傾向的低落の法則に反対する要因の一つとして対外商業はあげられている。したがって、対外商業は労働日の延長、労働力の価値以下への引き下げ等々と同様、あつかわれているものであり、対外商業そのものの研究ではない。従って、「資本論」は国民経済の深化発展という視角から叙述されていることは疑いない。
- (5) 馬場宏二教授は、レーニンとヒルファーディングを次のように評価されている。「経済的過程における金融資本と国際政治史上の現象たる帝国主義とを一括して把握する見地を示したのは、そしてそれによって段階規定を行ったのはヒルファーディングをこえるレーニンの功績だったといつてよい。しかし、レーニンは両者を一括する見地を示したただけであって、その内的連関を明らかにしたとはいえない。かえってヒルファーディングの方がすぐれた分析を事実上与えている部分さえ見える。」（社会科学研究1970、2月号115頁）
- (6) C. K. Hobson 「The Export of Capital」 楊井克己訳

（二）『帝国主義論』プランと資本輸出

これから、『帝国主義論』プランと資本輸出の関連をとりあげよう。

さて『帝国主義論』はレーニンがスイスに亡命中、すなわち、1916年1月～6月の間に執筆された。そしてこの書の基本的任務は、以前も今も争う余地のないブルジョア統計の総括資料とあらゆる国のブルジョア学者たちの告白とに基づいて、20世紀の初めの、すなわち最初の帝国主義的世界戦争の前夜の資本主義世界概観図が、その国際的相互関係において、どのようなものであったかを示すことにあった。又第二インターナショナルの崩壊と腐敗の産物である、「カウツキー主義の批判」に特別の注意がはらわれている。

「帝国主義ノート」の最大の学問上認識上の意義はそれがレーニン研究の内面を明らかにし、レーニンの研究活動の方法の特色、研究されている材料に対する経済的および歴史的事実に対する統計資料のとり扱い方を示し、分析の方法論と仕事のやり方を示している点にある。(レーニン全集^㉔序文)

多大の興味を引くものは、レーニンによる著「資本主義の最高の段階としての帝国主義」のプランの仕上げをなしている準備材料である。『帝国主義論』のプランは、現行『帝国主義論』の序文で著者自からが返べているように、時代的背景を反映して、厳しいツァーリズムの検閲を顧慮して、表題に関しても次のような考慮がなされている。すなわち、検閲のために、たとえば<現代(最近)資本主義の(資本主義の最新段階の)基本的特質>(„Die grundlegenden Besonderheiten des modernen (neuesten) Kapitalismus (seines neues Stadiums)”)と書き換える用意がなされ、帝国主義という政治的言葉は慎まれているようだ。それでもなお、レーニンの『帝国主義論』は政治経済学的な研究といえる。

『帝国主義論』の構想については、はじめのうちは、J・A・ホブソン、ヒルファーディングからその時代の特徴を示すものを拾い上げ列挙しているにすぎないが、具体的なプランでは、ホブソン、カウツキー、ヒルファーディングの誤りを指摘しつつ、次のような、ほぼ現行『帝国主義論』に近い内容が見られる

プラン1 (HEFTE^㉔219頁)
(邦訳^㉔196頁)

- (1) われわれの時代における資本主義の特殊な段階
- (2) 大生産の成長、生産の集積 (3) カルテルとトラスト
- (4) 独占 (5) 国際カルテルそれによる<世界の分割>

- (6) 銀行, その一般的役割
- (7) 銀行
- (8) 金融資本
- (9) 資本輸出
- (10) 植民地
- (11) 植民地の増加
- (12) 世界の分割
- (13) 発展の不均等と<世界の再分割>
- (14) 世界経済における相互関係の状況
- (15) 総括, 帝国主義の根本的な経済的(生産上)の特徴
- (16) 金融資本経済政策と帝国主義の批判?
- (17) 自由競争への復帰かあるいは資本主義克服のための前進か。
- (18) 資本主義の寄生性と<腐朽>
- (19) <超帝国主義>あるいは国際主義
- (20) カウツキーおよびホブソン対マルクス
- (21) 帝国主義の弁護論者と小ブルジョア批判家
- (22) 帝国主義と日和見主義
- (23) 1891年から1894年にいたる外交と対外政策
- (24) 帝国主義時代の民族問題
- (25) <絡みあい>対社会化

上のプランは各項目が次のように分類されて見出しと異文として整理されている。

- A 1 序 論 (HEFTE 231頁) (HEFTFはドイツ版 (ノートは邦訳 BAND39以下はHEFTFと省略) (大月版の全集39) (ノート 209頁))
- B 2—15 経済的分析 (基本的生産関係)
- C 18 寄生性
- D 16—17 経済政策
- E 19—22 帝国主義の評価 (……にたいする態度批判)
- F 23—24 若干の政治的相互関係と連関+18寄生性

25 ΣΣ

最終プラン (HEFTE 233頁) (ノート 210頁)

- I 生産の集積と独占体
- II 銀行とその新しい役割
- III 金融資本と金融寡頭制
- IV 資本輸出
- V 資本家団体のあいだでの世界分割
- VI 列強のあいだでの世界分割

- VIII 特殊の段階としての帝国主義 VIII 資本主義の寄生性と腐朽性
IX 帝国主義の批判 X 帝国主義の歴史的地位

レーニン⁽¹⁾は十以上のプランを残しているが、ここではその検討が目的ではないので、その基本的なものをとりあげた。まずプランから理解できることは、(一)レーニンは当時の歴史段階を資本主義の特殊な段階と認識していたこと。(二)その段階認識の基礎には生産の集積集中＝独占という事実 (三)どのプランにも資本輸出は大項目として存在し、帝国主義の経済的基礎として把握していることである。レーニンはヒルファーディングの欠陥(ノート 166頁)——(1)貨幣についての理論的誤り、(2)世界分割をほとんど無視、(3)金融資本と寄生性との連関を無視、(4)帝国主義と日和見主義との連関を無視——に陥らぬようにし、生産の集積集中そこから成長してくる独占体を中心にすえて、銀行資本と産業資本の融着による金融資本の形成、金融資本の龐大な富の蓄積、それが資本輸出の必然性を生みだし、その経済的紐帯によって、世界の隅々まで自己のもとに結びつけ支配することによって、世界の政治をも動かすようになるのであるとし、さらにヒルファーディングが「金融資本とは銀行の管理下であって、産業家によって充用される資本である」と定義したことについて、「この定義はその中に、もっとも重要な契機の一つ、すなわち、生産と資本の集積は、それが独占に導きつつあり、またすでに導いたほどに著しく進展したということ——の指摘がない限り不完全である。」と述べている。これは、レーニンが帝国主義を論ずるに当り、たえず経済的下部構造＝生産を根幹として、流通部門、上部構造が規定されるということを主張するものである。

資本輸出に関しても、他の論者の見解と異なるところは、彼がいかに金融資本の経済的基盤＝この生産様式の根本的不可避的な条件と前提から論じているという点であった。

では、レーニンは資本輸出にどのような項目を設定し、どのような資料を準備していたか「帝国主義論ノート」の資本輸出の項目(ノート 198頁)を参照しよう。

資本輸出(IV章)

序論 資本の成長とその矛盾

成長 ホブソン、レスキューール、メーレンス
 規模 ネイマルク、リーサー、ハルムス、アルントディウリッチ、カウマフン
 意義 商品輸出との結びつき、輸出と資本投下、ヒルファーディング（借款と輸出）、植民地における供給、中国、ロシア、日本等々における外国資本、ロシア、ドイツにおける資本、アルゼンチンにおける資本。

以上において、レーニンが構成しようとする資本輸出の内容および資料がおおよそわかる。資本輸出を帝国主義の経済的基礎として把握し、金融寡頭制の国際的広がり^①の網の目として、第4章に位置づけ、資本の成長とその矛盾としてその批判的視角^②を据えて、論理的歴史的考察がなされている。さらに、資本輸出の規模・意義などによって、帝国主義段階における、国際相互関連の有様、植民地との結びつき、などが論じられているのである。

レーニンの場合、自からも述べているように、『帝国主義論』についても、また資本輸出に関しても殆んどが、ブルジョア学者の統計資料と告白に基づいて、批判的摂取による叙述をなしているため、完全に論理的展開がなされているとは言い難い面を持っているというのも事実である。⁽²⁾

- (1) 「帝国主義論ノート」におけるプラン問題を詳細に検討されている馬場宏二教授の「帝国主義論」プラン（社会科学研究第21巻5、6号）を参照されたい。
- (2) 松井清教授は「レーニンは、先進国においては、資本の過剰が存在して利潤率が低いこと、後進国においては、資本の不足が存在して利潤率が高いこと、利潤率のちがいで、先進国からの資本の輸出が行なわれ、国際資本移動の生まれることを明確にしたけれどもそれ以上の理論的展開がない。資本主義の発展にともなって、いかにして資本の過剰が生まれるか、利潤率の低下がどうして資本の輸出を生むかを明らかにされるとき、資本移動論は完成される」（世界経済論体系10頁）といわれ、馬場宏二教授も、上掲論文で、資本論や金融資本論に比べて経済原理が欠如していることを指摘されている。

（三）資本の過剰と国民的利潤率

第4章序論で「資本の成長とその矛盾」を論じ、資本がいかにして外国貿易へと発展していくのか、ホブソンその他の人々の資料によって叙述していく。

外国貿易の問題に関しては「いわゆる市場問題」や「ロシアにおける資本主義の発展」の中で論じているのは周知のことである。レーニンは、

ナロードニキが資本主義社会の内部においては、剰余価値の実現の不可能性を主張するのに対し、マルクスの「資本主義的生産は一般に外国貿易なしには存在しない。しかし、与えられた規模における正常な年再生産が想定されるならば同時に次のことも想定されたことになる。すなわち、外国貿易は、使用形態および現物形態を異にする物品を内国産物品に代置するだけで、価値比率には影響を及ぼさず、したがってまた、生産手段及び、消費手段なる2つの部類が相互に交換される際の価値比率にも、これらの各部類の生産物の価値が分れ得るところの不変資本と可変資本と剰余価値との比率にも影響を及ぼさないということ、これである。したがって、年々再生産される生産物価値の分析に際して外国貿易を引き入れることは、ただ混乱を招く恐れがあるのみで、問題なりその解決なりの何らかの新たな要素を提供するものではない。それゆえ、外国貿易は全く捨象さるべきである。」

という命題をとり上げて、ナロードニキの誤りを指摘したのであるが、反面においては、資本主義は外国貿易なしには存在しえないという、いわゆる外国貿易の必然性について、3つの命題を提示した。

- (一) 資本主義は高度の商品流通が発展し、国家の境界を越えて流通する。
- (二) 生産の不均等発展の結果として、より発展した産業部門は外国市場を求める。
- (三) 生産規模の無限の拡大は、地方的障壁を越えて、各産業部門の自然的志向は、外国市場を求める必要へと導く。

ここにおける外国貿易は、商品輸出と資本輸出に共通する資本主義的發展の一つの側面＝外延的發展について論じたものであり、『帝国主義論』の中の4章、資本輸出では、かかる共通な側面と、また、商品輸出とは区別される資本輸出について論じているのである。

「交換一般と資本輸出の対置からはじめるのは歴史的にもまちがいであり、理論的にもまちがいである。」(レーニン全集^④ 493頁) というレーニンの見解は商品輸出と資本輸出の原因を理論的に共通なところ⁽¹⁾に求めて、歴史的には両者が並存しているということを示しているのである。

だが、『帝国主義論』の中では、外国貿易一般として論ぜず、特に商品輸出と

は区別される資本輸出として論じたのは、資本主義の最高発展段階としての特殊の段階ということを強調するためである。したがって、資本輸出は帝国主義段階においてはじめて発生するのではなくまた、逆に帝国主義段階においては、商品輸出が減退するのではなく、消滅するのでもないが、帝国主義段階にあっては、資本輸出は必然的であり、商品輸出とは異なる意義を持つものである。これは、この段階においては、資本の過剰は恒常化し、この新しい歴史的発展段階において、金融資本の価値増殖のためには、資本輸出こそ最も有効な手段だからである。この資本輸出は、金融資本の再生産構造と密接に結びつき、内的矛盾の展開—レーニンは資本の成長と矛盾、そこから資本輸出を説いている—であり、この矛盾の克服のための捌け口として、外国貿易、資本輸出をとらえている。これは前に見たマルクスの内的諸矛盾の克服の一つの方策として外国貿易、資本輸出を位置づけているのと同様である。

『帝国主義論』の第4章に位置づけられた資本輸出は、論理的には上向の過程、つまり、生産の集積・集中→独占の形成→金融資本の形成・金融寡頭制、この金融寡頭資本家達が、世界の経済的・政治的支配・分割のための経済的紐帯として、また、寄生性と腐朽性の原因として理解しなければならない。第3章から第4章への移行には論理的飛躍があることがよく言われる。それは3章までは金融資本の経済的基礎に独占の形成を理論的に解明し、4章以下では、独占から生れる必然的結果あるいは金融資本の運動法則を展開している。それを吉村正晴教授は次のように主張される。

「第三章までの前半における独占は、生産の集積→独占ということであるが、「資本の輸出」「資本家団体の間での世界の分割」「列強の間での世界の分割」の三者は、ともに「独占の主要な形態」または現象とせられているのである。」（『帝国主義論と全般的危機論』（『現代帝国主義講座』I 56～58頁）⁽²⁾）

レーニンにあっては、生産の独占は、それを基礎として、独占の原理（＝排他的に支配・独占）が働くという考えがある。これは「資本輸出」を考察する場合、きわめて大切なことである。国際金融市場における激烈な借款競争、独占的支配の寄生性と腐朽性、領土分割支配の基礎には独占があり、この独占は独占の原理をくまなく発揮させるからである。支配関係とそれに関連する強制

の関係—これこそ、「資本主義の発展の最近の局面」にとって典型的なものであり、そしてこれこそ、全能の経済的独占の形成から不可避免的に発生せざるをえなかったものであり、また事実、発生したのである。(レーニン全集^② 238頁)

資本主義的生産様式の発生とともに、絶えず蓄積される矛盾は、産業資本主義段階においては、外国市場の拡大と、周期的な恐慌によって資本の過剰を緩和した。だが、金融資本主義の時代はとりわけ国内的には (一)社会的生産と私的占有、(二)富と貧困、(三)都市と農村の矛盾が、最高度に激化した時代であり、対外的には、すでに市場は分割されつくし、しかも、列強は、独占を基礎とした保護関税障壁をはりめぐらして、自由な商品流通を妨げているので、資本輸出の必然性 (Die Notwendigkeit der Kapitalausfuhr) とともに、国際経済の依存と結びつきとの経済的国際網は資本輸出が典型的 (kennzeichnend geworden) 位置を占め、植民地その他の領域の排他的支配、従属関係をつくりあげるためには資本輸出は大きな意義 (gewinnt besonders wichtige Bedeutung) を持つに至ったのである。

われわれは資本輸出の必然性をこのように、資本の成長と矛盾の展開として捉えなければならぬのであるが、戸原四郎教授は、レーニンの「資本の過剰」の問題をとりあげ、⁽³⁾ 「資本主義の各発展段階に共通する、この生産様式の根本的、不可避免的な条件および前提でもって、レーニンは資本の過剰を説明している。したがって、そこから導き出されるものは、資本主義一般に共通する資本の過剰、すなわち、原理論的な「資本の過剰」である。結局、レーニンにあっては、段階論的な資本の過剰の意味の説明が不明瞭になっている。」と述べておられる。さらに、戸原教授は、「原理論的な意味の資本の過剰は純粋な資本主義社会では、労働力の商品化に基づく矛盾として、恐慌の必然性の根拠をなすとともに、恐慌をつうじて自から処理もされうるのである。金融資本段階における資本の過剰は、原理論におけるそれとは異なり、金融資本のより有利な価値増殖を実現するために、独占体によって不断に形成される過剰であり、したがってまた、金融資本の内部では処理されない過剰である。」とされる。また、山田隆士教授は、⁽⁴⁾ 産業資本段階における資本の過剰をとりあげ、資本の過剰が何たるかを説明するために、『資本論』第三卷第三篇十五をとりあげ (堀教授と同様に)、恐慌前夜における「一般的利潤率」の強い突然の低落

の開始とそれに続く恐慌＝崩壊過程で鋭く顕現する「資本過剰」の極限点としての「資本の絶対的過剰」が産業循環のいかなる局面で資本輸出に結びつつか、その関連性のために、「資本論」第三卷第5篇第30章—32章の「貨幣資本と現実資本」を研究されている。明らかにレーニンは資本の過剰＝資本の輸出を資本主義的生産の成長と矛盾＝この生産様式の根本的不可避性を金融資本の時代に段階規定する場合には、戸原教授のように、原理論とは異なるところに、資本の過剰の基礎を見いだすのではなく、まさにレーニンがなしたようにこの資本主義的生産様式そのものに基礎を見だし、独占段階における必然性を規定しなければならない。なぜなら、独占の時代＝帝国主義の時代は、産業資本の継続的発展の産物であり、したがって、この延長上に位置するものであるからである。（「帝国主義論」レーニン
全集② 307頁⁽⁵⁾

山田教授の場合、産業資本主義段階における資本の過剰を資本主義的生産＝蓄積過程そのものに求めながらも、その説明には、景気循環的側面に求めている。したがって、資本主義的蓄積段階のある時期に、資本輸出が必然的になり、典型的になるということは説明できない。資本の輸出を資本主義的生産の矛盾として捉えようとすれば、再生産構造にその基礎を見いださない限り、近代経済学者の言うような、単なる貨幣の移動＝前資本主義的のものであれ、いかなる形態の資本であれ区別なく＝をもって資本輸出として理解するものとなら変わるところがなくなってしまうのである。⁽⁶⁾

マルクスと同様、レーニンは資本の輸出を資本の成長とその矛盾として理解していることは序文から明らかである。

第4章「資本輸出」の序文では、「資本主義とは、労働力も商品となるような、最高発展段階にある商品生産である。国内の企業、個々の産業部門、個々の国における不均等発展性と飛躍性とは資本主義の下では避けられない条件であり、前提である。」という資本主義の成長とそれに伴う矛盾について述べ、続いて、イギリスを中心とした自由貿易主義は、独占の形成と共に保護貿易主義に転化したという歴史的背景が語られる。「はじめはイギリスが他の国にさきがけて資本主義国となり、19世紀の中頃には、自由貿易をとり入れて、「世界の工場」、すなわち、すべての国へ製造品を提供する国という役割を要求

し、他の国々はこれと引き換えに原料品をイギリスに供給しなければならなかった。しかし、イギリスのこの独占はすでに19世紀の最後の4半紀にそこなわれた。なぜなら、一連の他の国々が保護関税にまもられて、自立的な資本主義国家に発展してきたからである。そして、われわれは、20世紀にかかる頃に別の種類の独占が形成されたのを見る。それは第一には資本主義の発展したすべての国における資本家の独占団体の形成で行り、第2には、資本の蓄積が巨大な規模にたった少数の富裕な国々の独占的地位の形成である。先進諸国では巨額の「過剰資本」が生じた」と（国民文庫副島訳
帝国主義論80頁）この叙述は明らかに、第4章冒頭の「自由競争が完全に支配する古い資本主義にとっては、商品[・]の輸出が典型的であった。だが独占体の支配する最新の資本主義にとっては資本[・]の輸出が典型的になった。」に呼応したものである。

すでに、資本主義は1873年の恐慌以降、ある種の経済現象が新たな発展段階に移行しつつあった。マルクス・エンゲルスもそのことを認識していた。たとえば1879年4月10日付ダニエルソン宛の書簡で「鉄道建設は先進諸国家で資本主義的生産の終局的発展、したがって終局的転化を促進させた。」「鉄道は資本の集積にたいし、これまで思いもよらなかった衝撃をあたえ、貸付資本の世界をまたにかけた活動をも促進した。この貸付資本はこのようにして全世界を金融詐欺の網の目と国際的『友愛』の資本主義的形態たる相互債務ではりめぐらした。」と述べた。レーニンにも段階的把握は早くからあったが、独占体の歴史については、フォーゲルシュタインの論文《資本主義的工業の金融組織と独占の形成》（ノート
420頁）から学び、「新しい帝国と古い帝国の特徴」についてはJ・A、ホブソンから学んでいる。（ノート
394頁）新しい帝国主義はつぎの点で古い帝国主義と違っている。第一に、一個の成長しつつある帝国の野心のかわりに、それぞれ政治的拡張と商業的利得とに対する同様の欲求に動かされている競争しあういくつかの帝国の理論と実践があらわれたことであり、第二に、金融上の利益あるいは資本投下の利益が商業上の利益に優越していることである。（下線はレーニンイタリック文字）ここから、「自由主義段階には商品輸出が典型的になり、独占の支配する最近の資本主義にとっては資本の輸出が典型的となった。」を引きだしたのである。ヒルファーディングは金融資本にとっては産業資本の輸出がますます重要

になってくると言うが、レーニンは、産業資本の輸出の意義を強調するが、国際借款についても、排他的独占という点から強調する。なぜなら、ヒルファーディングは資本の組織性を強調するのに対し、レーニンは、資本の独占的支配を強調するからである。独占体はいたるところで独占原理を伴う。すなわち、生産場面および流通部面のみならず政治部面でも独占を欲する。したがって、「貸付資本」の輸出「産業資本」の輸出によって経済部面を支配独占すると共に、政治的支配も欲するのである。⁽⁶⁾

レーニンは、少数の爛熟した資本主義国には、巨大な蓄積—過剰資本の存在を指摘し、これこそが今や、商品取引関係を優越して資本輸出が国際経済の経済的紐帯となっていることを見たのである。かかる資本主義的生産様式の内的機構から生みだされる資本の過剰（資本輸出の必然性を規定するところの）と並び、いくつかの帝国主義が独占を求めて競争しあうという歴史的条件の中では、世界市場を排他的に支配独占するためには資本の輸出が最も有効な手段である。有利な取引きのために「縁故」を利用することが、公開市場での競争にとってかわる。借款の一部を債権国の生産物、とくに軍需品、船舶等々の購入に支出することを借款の条件とするのは、もっとも普通のことである。資本の輸出は商品の輸出を助長する手段となる。⁽⁷⁾（国民文庫副島訳）（帝国主義論85頁）

レーニンは、ブハーリンの著、『世界経済と帝国主義』に序文をよせ、この書の科学的意義は「全体としての、またもっとも高度に発展した資本主義の一定の段階としての、帝国主義に関係ある世界経済の基本的な事実を考察しているところにある。」と述べ、さらに「交換の一定の発展段階で、すなわち、ほぼ19世紀と20世紀の境目で到達された段階で、交換は経済的關係を大いに国際化し、資本を国際化し、大規模生産は非常に大規模なものになったので自由競争する一国内で、または諸国間の関係での一企業ではなく、企業家の独占団体、トラストであった。世界の典型的な『支配者』となったのは、すでに金融資本であった。」（Lenin werke ②104頁）（レーニン②113—114頁）

資本主義的生産の発展とともに、商品交換も資本輸出もともに国際化していく。だがしかし、「商品交換はまだ植民地をその交換関係の中に引きこみながら、まだ資本主義的生産に引きこんでいない。帝国主義はこれを変化させた。

帝国主義はとりわけ資本の輸出である。資本主義的生産はますます急速に植民地に移植されている。」(Lenin werke②344頁レーニン全集②)
(自決に関する討論の総括394頁)

これを資本の世界市場の歴史的発展段階での運動と関連させて考察すると、資本にとって外国貿易(市場)が絶えず拡大する場合には、 $W'-G' \begin{cases} G \\ g \end{cases}$ の過程、つまり、商品輸出はとどこおりなく行われ、資本の過剰は問題にならないし、逆に $G-W$ つまり、原料食糧の輸入もとどこおりなく行われる。(これらの生産物はその生産様式を問わず商品となりうる。したがって、それらの生産様式は直接的影響は受けない)しかし外国貿易が制限されていて $W'-G'$ に転態が容易にできない場合(商品資本の過剰)や $W'-G'$ に転態できても、 $G-W$ に転態できない場合に(貨幣資本の遊休—国内に有利な投資のための場所がないとかまた原料の輸入が容易でない)は恐慌による価値破壊ないし資本輸出を促すであろう。

ところで、イギリスが「世界の工場」としての地位を誇っていた自由主義段階には $W'-G'$ の過程は容易に転態可能であったし、 $G-W$ に転態することも容易であった。ところが、イギリスでは資本に転化される以上の剰余価値が海外から流れ込み、豊富な貨幣市場を形成し、この貨幣資本を貸付資本、有価証券として、一般的には企業支配を直接要求せず、したがって投下先についての政治的支配も必しも要求しないところの資本輸出がアメリカ、ヨーロッパ、ロシア、インド等々におこなわれた。この頃の投資は主として鉄道投資であったことからわかるように、商品輸出市場のための投資であった。

後進国ドイツやアメリカの場合は、保護関税政策や株式会社の発達を通じて、またたくまに金融資本主義段階に達した。独占形成後も、各国の育成保護関税政策は、大工業のための高率保護関税政策にそのまま転化し、市場はほぼ分割されつくし、しかもブロック化によって商品の自由な流通を阻害されているので、 $W'-G'$ の過程の転換は困難になり、したがって商品資本の過剰(貨幣資本もまた)が生じた。その克服のためには、産業資本を輸出するとか、借款を与えることによって、資本の過剰を克服し、また、競争者を世界市場から排除し独占しようとする原理がはたらくのである。当然、保護関税制度は国内における資本の成長を促進するが、経済領域を制限するため、資本の過剰—そ

の結果として利潤率の低下に導き、海外投資への誘因を増大させる。資本の輸出は輸出された国において資本主義的生産様式をつくりだした。¹⁴ 一方における利潤率の低下は、新しい諸資本の競争を一段と激化させ、他方における保護関税は「世界市場の支配を決定すべき最後の一般的工業戦の開戦準備をおしすすめ」、^(資本論第3巻⁵³⁴ エンゲルスの注) 資本の輸出は全世界における資本主義の一層の発展を拡大し深めた。

- (1) レーニンは党綱領を書きかえるにあたり、部会に対し次のような意見を主張する。
「綱領は、資本主義のもっとも単純な現象から出発して、より複雑な「より高度な」現象へ、交換から商品生産へ、大企業による小企業の駆逐へ、恐慌等々へのぼっていき—またのぼっていかねばならない—最後に、いまようやく先進国で成長しつつあり、また成長をとげたばかりの最高の段階としての帝国主義に到達する。実生活ではこうなっている。「交換」一般と資本輸出の対置 (СОПОСТАВЛЕНИЯ РЯДОМ «ОБМЕНА» ВОАЩЕ И ЭКСПОРТА КОПИТАЛА) からはじめるのは歴史的にまちがいであり、理論的にもまちがいである。」^{(レーニン全集④493) (ЛЕИНИН②146)}
- (2) 前半の三章までにおける独占と後半における独占の概念の相違を強調される吉村教授はさらに続けて「国際カルテルは現代の経済闘争(世界の分割)の本質を示す。この場合の独占の主要な意味は、少数、複数の帝国主義列強が世界を分割し、それぞれの経済領域を排他的に支配=独占する点にある。もう一つの意味は「早いもの勝ち」に自由に土地を占有しえた「非独占的」な植民政策の時代が終って、世界領土の占有が行き尽したという歴史的事実にもとづくところの「植民地の独占的領有のことである。」と(前掲書58頁) こうした独占概念が種々存在するのは、生産資本の独占の存在するところに独占原理が働くとするレーニンの考えによるものと思われる。
- (3) 戸原四郎「ドイツ金融資本の再生産構造」武田隆夫編「帝国主義論」上、戸原教授と同様にいわゆる段階論を主張される五味久寿氏は(社会科学16号1969年12月号)、金融資本の下における過剰資本形成のメカニズムについて次のように述べられる。「金融独占体がその独占価格を維持するためには、国内供給の制限を要求されるという、したがって、生産設備の一部を組織的に遊休化し、利潤の追加的資本への転化による生産拡張の制限を要求されることにもとづくジレンマである。しかも、生産設備の組織的遊休化は、これに付属していた労働者部分をも当然組織的に過剰なものとして排除する。さらに、その独占利潤は、その追加投資への転化が組織的に制限されることから遊休貨幣資本、過剰な資本としてあらわれることになる。しかし、この過剰な資本は対外ダンピング戦の行きづまりを打破するために、商品輸出の金融的手段として外国に輸出されることになる。…金融資本にとって、直接問題になるのは生産過程に固定された生産設備としての資本の過剰—すなわち現実資本の過剰である。」と。
- (4) 山田隆士「資本の過剰と資本輸出」中央大学80周年記念論文

なお、「資本の過剰」について混乱が生ずるのは、吉信庸教授が言われるように、

(「資本輸出の諸問題」)(経済評論1957年10月号)「資本の過剰はその原因からだけでなく、その形態からも区別されねばならないということ、すなわち、産業資本の過剰と貨幣資本の過剰(資本の過多)との区別、前者は過渡的な資本の過剰、過剰生産恐慌と関連するが、後者は一定の諸段階でたえず生ずるところの、必ずしも過剰生産を表現しない信用制度の発展と共に発展する資本の過剰である。一般に資本の過剰という場合、この形態上の区別をしないことから種々の混乱が生じているものと思われる」と。山田氏の場合、吉信氏のいわれる貨幣資本の過剰に資本の過剰を求めておられるのである。

- (5) 諫山正教授は「レーニン自身の論理の中には、明確な意味での原理論における「資本の過剰」と帝国主義段階における「資本の過剰」が混在しているという他はない。と主張し、したがって、「原理論における「資本の過剰」と段階論におけるそれとの関連をより明確にしなければならない。」と(「資本の過剰」と資本輸出、新潟大学経済論集1968年3号)帝国主義段階に至って、「資本の過剰」はますます深化すると主張は、氏によって、深化説と呼ばれ、その典型として、吉村正晴『貿易問題』(164~168)があげられている。
- (6) レーニンは第4章で国際金融市场について論じる予定であったが、途中脱落した。産業資本主義段階における商品流通の媒体としての国際金融市场の役割と帝国主義段階における有価証券発行業務などへの金融市场の機能の変化の問題等、資本輸出を論じる場合とりあげなければならない。その際、深町郁弥教授が主張されるように(信用論体系と金融市场)資本の蓄積過程との関連で論じられねばならない。(金融経済121号)
- (7) ヒルファーディングには、金融資本にとって重要なのは生産資本の輸出であるという指摘があるがレーニンはただ帝国主義の3つのパターンとしてあげた、イギリス植民地型帝国主義、フランス高利貸の帝国主義、ドイツの第3型帝国主義は、資本輸出の形態によって区別されているのである。かかる区別は、金融再生産構造と結びついた、独占支配の形態に基いている。レーニンは帝国主義の腐朽性と寄生性を強調する一方、他方では以前とは比較にならぬ程の発展を強調する。資本輸出に関してもその両面が存在することを指差しているようだ。例えば、帝国主義段階においてはドイツのような生産資本の輸出が有利であるが、しかしドイツでもすでに腐朽性と寄生性がみられることを指摘している。
- (8) 資本の輸出も商品の輸出も共に、利潤を唯一の推進動機とする資本の活動の一局面をなすものだから、最高の利潤率を追求する点においてなんらの区別もあり得ない。だが、商品の輸出は必ずしも国内市場よりも高い利潤を条件としないのに、資本の輸出には、それが絶対の条件になる。(K. Marx. Das Kapital III 224)だが、国際金融市场では、非常に良好な状態にある訳でもなく、政治上の見通しも有望でないのに、外国からの借款を断りきれない。すなわち、将来の支配、従属ないし利権を得るためである。このように、独占体は、独占原理をとまなうのである。(レーニン全集②) 281頁

資本は最大限の利潤を追求する。したがって、利子率、利潤率の低いところから高いところへ移動する傾向を持つのは当然のことである。マルクスは国民的利潤率の相違について次のように述べている。(Das Kapital III 175
青木長谷部訳Ⅲ, 上, 230)

$90c + 10v + 10m = 110, \dots (1)$ $10c + 90v + 90m = 190 \dots (2)$ 商品が価値どおりに売られるならば、第一の生産物は110で売られ、そのうちの10が剰余価値を表示し、第2の生産物は90の剰余価値を表示する。このことは、国民的利潤率が相互に比較される場合には特に重要である。とし次の式を掲げる。

$$\text{ヨーロッパ} \quad 84c + 16v + 16m = 116 \quad (\text{利潤率} 16\%)$$

$$\text{アジア} \quad 16c + 84v + 21m = 121 \quad (\text{利潤率} 21\%)$$

剰余価値率はアジアでは、ヨーロッパのそれとはいえ、利潤率は後者の方が高い。たいていは、相異なる国民的利潤率は、相違なる国民的剰余率に基づくであろう。

資本の有機的構成の高度化は一般的利潤率の段階的低落をきたす。

(Das Kapital III 242
青木長谷部訳Ⅲ, 上, 315)

$$(1) \quad 50c + 100v + 100m = 250 \quad (P' = 66\frac{2}{3}\%)$$

$$(2) \quad 400c + 100v + 100m = 600 \quad (P' = 20\%)$$

一国における相異なる継起的発展段階についていえることは、相違なる国々における相異なる同時並行的発展段階についてもいえる。この2つの国民的利潤率は剰余価値率の相違によって打消されることもある。

マルクスは (一)商品が価値どおりに売られれば、後進国の国民的利潤率が先進国のそれより高い (二)それは、主として有機的構成の相違に由来している。(三)剰余価値率の相違によって反対にもなりうる。(四)一国における継続的発展による利潤率の低落と同時的並行的な発展段階の相違なる利潤率の相違を同一視している。

ヒルファーディングは、「資本輸出の条件は、利潤率の相違である。資本輸出は、種々の国民的利潤率の高さは、資本の有機的構成に、したがって資本主義的発展の高さに懸っている。資本主義的発展が進んでいけばいる程、それだけ一般的利潤率は低い。この一般的規定はあまりここで重要でない。というのは、ここでの問題は、世界市場商品であり、その価格は最も発展した生産方法

によって決定されるからであるが、この一般的規定にさらに特殊的諸規定がつけ加わる。後進国における特殊的規定というのは、銀行や信用組織の未整備のため、利子率が高く、労賃、地代が安いこと、特権や独占によって利潤率が引き上げられる。」というのである。(金融資本論林 要訳462頁)

マルクスにあってはヒルフェディングにあっては、後進国では資本の有機的構成が低いから利潤率が高く、したがって、先進国の資本が高い利潤率を求めて移動するというのではない。世界市場競争を前提すれば、「一般的規定」は意義を失うから、先進国の資本が後進国に輸出されて高い利潤率を得ることができるのは特殊的条件—資本が少なく、地代が安く労賃が安い。独占的支配—によるものである。国民的利潤率というのは存在することは疑い得ないが、資本輸出の条件として確定的存在ではない。やはり資本が後進国に輸出されるのは、そこでは確実に高い利潤率を確保できる条件が存在するからである。この点、マルクス・ヒルフェディング、レーニン⁽¹⁾の一致した点である。レーニンはさらに、帝国主義という世界市場が分割されつくしている歴史的段階にあっては、かかる有利な条件を独占的に支配するために、若い資本主義国は、資本を借り入れて、それを再び輸出する方法もあるという。

さらに利潤率との関連においてであるが、資本主義の成長によって生みだされる資本の過剰（資本輸出の必然性を規定する）の結果として、利潤率の低下が生ずる時には、有利な投下場所を求めて、資本の輸出が促進される。しかしながら、単に、資本主義の発展過程において、資本の有機的構成が高度化したため、利潤率が低下する場合ないし、資本の発展度の相違によって国民的利潤率が相違するということでは、資本輸出の強力な誘因とはなり得ない。⁽²⁾

だが、資本の本性がより高い利潤率、利子率を求めて移動するのは当然ありうることはもちろんである。

レーニンが、「資本輸出の可能性は一連の後進国がすでに世界資本主義の軌道の中に引き入れられ、鉄道幹線が開通…または敷設されはじめ、工業の発展の基本的諸条件がすでに保障されていることなどによって作りだされている。」というのは、先進国では未だ独占は形成されていないが、資本にとって、より有利な生産条件が存在すれば、資本は輸出されうるだろうし、資本輸

出の必然性とは、資本の成長が独占を生むに至り、内的必然性として、また独占を基礎としての独占的支配の経済的紐帯として区別したものであろう。

したがって、資本輸出の必然性を規定するものは、資本の過剰であり、より高い利潤率はその目的であるといえよう。

自由主義の段階にもイギリスから相当の資本輸出がおこなわれていた。だがしかし、特に独占段階にあって強調しなければならないのは、単なる量的増大だけではなく、質的变化を見なければならぬ。それは単に再生産構造における変化だけからではなく、資本輸出を媒介する金融市場における機能変化をもとりあげることによって帝国主義段階における資本輸出の重要性を論証することができるであろう。

- (1) 植民等に投下された資本が高い利潤率を得るのは、マルクスに依れば、「資本が高い利潤率を生じうるのは、植民地などでは総じて発展度が低いので利潤率が高く、また奴隷や苦力などを使用するので搾取度も高いからである。」（*Das Kapital* III 266 青木長谷部訳Ⅲ、上、347）レーニンは「後進諸国では、利潤率が高いのが普通である。なぜなら資本が少なく、地価は比較的安く、賃銀は安く、原料は安いからである。」（レーニン全集22）278頁
- (2) 吉村正晴教授は、「世界市場における競争を前提すれば、先進国の国民的利潤率は後進国のそれと比較して必ずしも低いとはいえない」といわれ、先進国の資本が後進国に輸出されるのは、そこでは費用価格の低減が可能であるからだ。」と（「資本の国際的移動と国民的利潤率」（九大産労研所報創立10周年記念論文集）

吉村教授の見解は、国際価値論の立場から正当な支持を受けるのであるが、しかし、本文中に引用したマルクスの文章を読めば、国際間における剰余価値率の相違を捨象すれば一国内においても、有機的構成の高度化にさいして、剰余価値率の変化は捨象したままで、利潤率の低下傾向を説いている——、有機的構成の相違によって利潤率の相違を一般的に論じていることが分る。とすれば、有機的構成の相違から導かれる国民的利潤率の相違によって資本輸出を説明することはできず、過剰資本や、費用価格の低減等によって説明せざるを得ない。なぜなら、後進国では有機的構成が低いから、利潤率が高いのであるが、先進国の資本は後進国に於いて生産を低めることによって、利潤率を高めようとはしないから。

（四）学説史的批判

レーニンの資本輸出論を他の論者との区別を明瞭にするために、諸論者を取り上げよう。レーニン自身「帝国主義論」でJ・A・ホブソンを高く評価している。それはJ・A・ホブソンが帝国主義の寄生性と資本輸出の関連を強調し、帝

国主義の経済的基礎（本質）を見ぬいているからである。ホブソンは資本輸出については、「金融業者—投資家が大きな利潤を獲得するために、国家をも従えて、侵略的帝国主義を助長するものであり、これこそ有利な資本輸出のための闘争である。（ホブソン「帝国主義論」60頁）」と述べている。かかる資本輸出に対するホブソンの見解が、ストレイチャー（『THE END OF EMPIRE』邦訳関嘉彦他訳第6章）をして、レーニンの資本輸出の捉え方である帝国主義的膨脹—資本輸出の最も主要な動機は、各帝国主義国内の輸出業者および金融寡頭家たちによる市場ならびに有利な投資への要求ということにおいて共通するものであるとしてホブソン・レーニン理論を同一体系のものであると指摘させることになったのであろう。この点についてのストレイチャーの指摘は正しいものであろう。

ところが、ストレイチャーは「資本輸出」のその体制との紐帯や形態は強調されてきたが、レーニンの『帝国主義論』が打ち立てられてきた基礎はしばしば無視されている。」と次のように主張される。「レーニンは、後期資本主義は本質的には、その生産物を本国で有利に処分できないという、その固有の性質によって、帝国主義的にならざるを得なかった。換言すれば、レーニンの「帝国主義論」は大衆窮乏化説をその中心的特徴とするものといってよい。マルクスの必然的な資本主義発展という考えにしっかりと立脚している。」と述べている。こうして、この側面すなわち、ホブソン、レーニン理論は過少消費説あるいは大衆窮乏化説から見ても同一体系のものであるとされている。⁽²⁾ このストレイチャーの指摘はレーニンがホブソンの小ブルジョア主義と批判したところのものであり、従って誤謬である。⁽³⁾ ストレイチャーによれば、レーニンの誤りは、非資本家大衆の消費を十分に、又持続的に上昇させることにより、帝国主義にかわる抜け道が成熟資本主義にあることを見そこなった。レーニンはエドワード時代のイギリスにおける社会的諸力の一時的なあり方を、あらゆる時として、すべての資本主義に通用できる厳格な法則に普遍化した誤りをおかした。」と、ストレイチャーは、非資本家大衆の消費を上昇させることによって「帝国主義の終焉」（THE END OF EMPIRE）を主張するのであるが、レーニンはこれに対して次のように述べている。「もし資本主義が現在いたる所で工業よりおそろしくおくらせている農業を発展させることができるなら、

またもし資本主義が、めざましい技術的進歩にも拘わらず、いたるところで半ば飢えた、乞食のような状態にとり残されている住民大衆の生活水準を引き上げることができるなら、その場合には、もちろん、資本の過剰などは問題になり得ないであろう。そのような「論拠」は、小ブルジョアの資本主義批判者たちによってたえずもちだされている。だが、その時には、資本主義は資本主義でなくなるであろう。」（レーニン全集⁽²²⁾ 309頁）

つぎに、レーニンの『帝国主義論』とその資本輸出にあづかって最も貢献したと思われるヒルファーディングの資本輸出を見てみよう。

その前に、レーニンの資本輸出について馬場宏二教授（社会科学研究第21巻第5・6号における「帝国主義論」プラン）の次の指摘に耳を傾けよう。「レーニンの資本輸出論ははなはだ不備である。第3章まででヒルファーディング＝ドイツの事態とホブソン＝イギリスの事態とを単に二重写しにただけで、金融資本の国別の性格規定を明確にしていなかったことに応じて第4章でも、ロンドンからなされる証券投資が代表するところの、一般には企業支配（つまり利潤）を直接要求せず、したがって投下先についての政治的支配も必ずしも要求しない——といってもむろん投下資本の安定が確保しにくい地域に対しては当然それを要求する——資本輸出と、ドイツの独占体による直接投資が代表する、企業支配を要求し、したがって投下先の政治的支配をより強く要求する資本輸出とが区別されていない。」馬場教授のレーニン資本輸出の欠陥として指摘されるどころのものを検討せずしては、この小論も不備におわることになるが、「帝国主義論」自体の検討という根本問題になるので力の及ぶ筈がないから、ここでは、資本輸出に関してイギリス型とドイツ型を検討することにする。（展開は第3篇での予定）

「貸付資本」と「産業資本」輸出を区別して論じたことはヒルファーディングの功績とされるのであるが、このことによって、何を意図し何を論じようとしたのだろうか。この点はこれまで明確にされていないように思える。

資本輸出を金融資本の経済政策として理解するヒルファーディングは、その著『金融資本論』の第五篇「金融資本の経済政策」の第21、22章において資本輸出について論じているが、ほぼ次のような骨組みになっている。まず21章で

「イギリスでは産業資本および商業資本の要求により、自由貿易主義が勝利を占め、その結果、資本の発展は有機的な小から次第に発展して行った。その為、組織の面では主として個人経営が長い間支配的であった。これに対し、後進国ドイツは、育成保護関税→株式資本の組織→高率保護関税へと転化し、あらゆる資本の金融資本化の程度を標準とすれば、自由貿易国のイギリスではなく、かえって保護関税国のドイツ・アメリカが資本主義的発展の典型となった。外国産業による国内市場の征服に対する防衛手段だった保護関税は、いまや強者の攻撃武器になった。保護関税は、この国では特別利潤を意味し、そしてこの特別利潤は商品のかわりに商品生産そのものを外国へ持ち込む一動機となる。資本主義が未発達だったあいだは、このような可能性は比較的すくなかった。それは一部分は、資本主義的生産のための経済的前提条件がまだ充分でなかったからである。発展した国の資本にとっては保護関税体系が利潤率におよぼす作用の有害な結果は、資本輸出の手段で克服できることになる。」と述べこれに続いて22章で「資本の輸出というのは外国で剰余価値を生むべく予定された価値の輸出である。……………」それに続いて「資本の輸出には輸出する国の立場からすれば2つの形態がある。「利子を生む資本」と「利潤を生む資本が」続いて「資本輸出の条件は利潤率の相違である。資本の輸出は国別の利潤率を調整する手段である。……………」となっておりこのあとでは資本輸出の効果が説かれている。

以上に見て来たことから明らかなことは、「貸付資本」と「産業資本」の区別はイギリスとドイツ・アメリカの歴史発展に裏づけられながら、「産業資本」としての輸出を資本主義的発展の典型的なものにとって重要であること、すなわち、金融資本にとって産業資本の輸出こそ重要であるということを主張したのであった。だからこそ、彼は「資本輸出の条件を利潤率の相違」に求めたし、また産業資本の輸出は低開発国の開発を意味し「国別の利潤率の均等化の手段」とみなしたのである。そこに、レーニンはヒルファーディングの欠陥として金融資本と寄生性との連関のないことを指摘したのであるが、レーニンの場合は、「資本の輸出は、資本が向けられる国で資本主義の発展に影響をおよぼし、その発展をいちじるしく促進する。だから、ある程度、資本の輸出は輸

出国での発展をいくらか停滞させることになりかねないとしても、そうなるのは、まさに全世界における資本主義のいっその発展を拡大し深めることの代償としてである。」（レーニン全集²²）
280頁

最後にレーニンが激しく批判したカウツキー論を見てみよう。カウツキー派は（K・カウツキー、スペクタートル派）、は<健全な>、<平和的な>、<平和な交通>に基づく資本主義の諸事実をあげ、これを金融的略奪、銀行独占体、国家権力と銀行との協定、植民地抑圧などに対置し、これを正常なものとして不正常なものに、望ましいものとして望ましくないものに、進歩的なものとして反動的なものに、基本的なものとして偶然なものに等々対置する。

（ノート）
86頁）

このようなカウツキー派は、巨大な富の糸で世界が結びつけられているのに、<平和が破壊されうると考えることができようか、こうした膨大な数字（有価証券の額）にも拘わらずあえて戦争を起すものがあるか…>という超（帝国）帝国主義の可能性を主張し、<帝国主義は、高度に発展した産業資本主義の産物である。帝国主義はそこにどんな民族が住んでいるかにはかかわりなく、ますます大きな農業（カウツキーの強調）地域を隷属させ、併合しようという、あらゆる産業資本主義的民族の志向である。>と述べる。（レーニン全集²²）
ノート235

これに対して、レーニンは「帝国主義にとって特徴的なのは、まさに農業地域だけでなく、もっとも工業化された地域の併合を求める志向（ベルギーにたいするドイツの欲望、ローレヌに対するフランスの欲望）である。としてカウツキーの一面性を指摘する。

結局、カウツキーにあっては、「帝国主義は<経済的段階>ではなくて、マンチェスター主義のような特殊な政策である。金融資本と帝国主義—<その政策>とは区別されなければならない」ということになり、「カルテルの政策が対外政策へ移されることを、すなわち超帝国主義の段階をとおることは、ありえないことではない」と主張するのである。また資本輸出による寄生性と腐朽性も否定してしまうのである。

- (1) 吉村正晴教授は「ホブソンは帝国主義的植民地政策の最も重要な動機と見做し、かつそこに帝国主義の寄生性を強調した。レーニンの資本輸出論はヒルファーディング

ではなくて、ホブソンの類型に属すると言われる。「現代の資本輸出」（九大産業労働研究所報第46号）

- (2) 小椋広勝教授は、「ストレイチーがレーニンの理論だと言っているところのものは、ローザ、ルクセンブルグの「蓄積は一つの排他的に資本主義的な環境のもとにおいては不可能である。だから、資本主義発展の最初の瞬間からして、非資本主義的な諸層および諸国へ膨張せんとする衝動が……植民政策が「開拓政策」が、資本輸出が生ずるのである。」という理論であって、「レーニン学説では、世界的規模での生産と資本の集積が資本輸出をひきおこすのであり、ホブソンのように、国内的規模での過剰生産が、資本輸出を引きおこすものと考えるのではない。資本制生産の下では国内市場と世界市場は、はじめから存在するのであり、国内市場が飽和してから世界市場が開拓されるのではない。この点でホブソン学説といっしょにするのはマルクス経済学に対する無知以外の何もでもない。」（マルクス経済学講座Ⅱ）^{19頁}と批判される。小椋教授の前半の主張は正しいが、後半の主張には、承服しがたい。本文中に述べたように、レーニンは「新しい帝国主義」についてはホブソンに学んでいるし、ホブソンはイギリス一国を取り上げたことについては自身が断っている。（ホブソン「帝国主義論」参照）
- (3) 小ブルジョア主義のJ・Aホブソンは次のように述べる。「一見したところ、生産力と資本が消費を上回って、自国内に捌け口を見いだせないかのようである。まさに、ここに、帝国主義の根源がある。……だが、もしも、その国の消費者が生産力の上昇と歩調をあわせて消費水準を高めるなら新しい市場を見いだすために、帝国主義にうったえる必要があると、あるいは資本の過剰はあり得ないだろう」と（J・A・ホブソン帝国主義論）

（五）む す び

レーニンは帝国主義を金融資本の世界体制として握し、その最も重要な経済的基礎は独占であり、その独占が世界的にも確立されたのを20世紀初頭にみた。かかる金融資本の世界体制の主要な経済的紐帯は資本輸出であり、それによって帝国主義諸国間の、また帝国主義国と植民地間の利害関係は結びつけられている。したがって、レーニンの資本輸出は、金融資本の再生産構造にしっかりと根をおろし、帝国主義の主要な構成要素として組みこまれており、単なる利子率利潤率の相違をもって移動する資本のことを資本輸出と呼んでいるのではない。つまり、レーニンにあっては、資本輸出の問題は (一)金融資本家達の世界的な運動を示し (二)先進国における過剰資本の問題を基抵とし (三)利子率、利潤率の問題 (四)商品販売市場および資本の活動領域としての植民地 (五)原

料供給地の植民地 (六)資本借款と利権 (七)民族解放運動 (八)帝国主義の寄生性と腐朽性との関連で述べられているのである。このように、『帝国主義論』における資本輸出は、狭い意味での商品輸出と対置されているのではなく、金融資本の経済的基礎である独占を基抵とし世界経済の相互依存と結びつき=利害関係の経済的紐帯として位置づけられているのである。

したがって、レーニンの意味において資本輸出論を展開しようとするれば、彼の分析視角に基づいて「帝国主義論」がいかなる時代的背景の下に書かれ、また何を最も強調したかったのか、さらに、この書の一章を占める資本輸出はいかなる方法で分析され、いかなる位置づけがなされ当時の状況がいかなるものであったかを知る必要がある。そうして初めて、当時の資本輸出の意義を的確に理解できるし、現代世界経済を分析研究する方法も学びとることができる。たとえ、資本輸出一般を論じるとしても、かかるレーニンの視角を失うと、それはもはや資本主義を批判的に考察するという態度も失われることになる。つづいて、資料に基いて資本輸出を展開するが紙数が制限されているので次回にゆずる。(この小稿は45年3月に提出した修士論文の一部を補筆したものである。)

1970. 9. 3 (未完)